

# 農作物技術情報 第6号 水稻

発行日 令和3年 8月 26日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 品質低下を防止するため、完全落水は出穂後30～35日後としましょう。
- ◆ 刈取り始めの目安となる日（登熟積算気温950℃に達する日）は、平年より早まる  
ことが予想されます（8/20現在）。籾の黄化状況やテスト籾摺りにより、刈取適期を十  
分見極めるとともに、ゆとりをもって収穫できるよう、早めの準備を心がけましょう。
  - ・ 刈取適期の目安は、黄化籾割合で80～90%です。
  - ・ コンバインや乾燥調製施設の点検、整備は早めに行いましょう。
  - ・ 籾の乾燥は二段乾燥を心がけ、玄米水分15%以下に仕上げましょう。
  - ・ 異品種混入（コンタミ）対策を徹底しましょう。

## 1 生育状況

農業改良普及センター調査による各地域の水稻の出穂は、平年に比べ4～7日早く、県全体の出穂盛期は7月31日（平年差－5日）となり、過去40年間で最も早くなっています（表1）。

表1 水稻の地帯別出穂時期（各農業改良普及センター調べ）

地帯名	本年(月/日)			平年(月/日)			平年差(日)		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期
北上川上流	07/27	07/31	08/04	08/02	08/06	08/10	-6	-6	-6
北上川下流	07/28	07/31	08/04	08/02	08/05	08/09	-5	-5	-5
東 部	07/27	07/31	08/05	08/03	08/06	08/10	-7	-6	-5
北 部	07/28	07/31	08/04	08/03	08/06	08/11	-6	-6	-7
県 全 体	07/28	07/31	08/04	08/02	08/05	08/09	-5	-5	-5

- 1) 県全体：地帯別の水稻作付面積比による加重平均。
- 2) 出穂始期：10%、盛期：50%、終期：90%に達した日。
- 3) 平年：平成23年～令和2年の10ヵ年の平均値。

## 2 気象経過

### (1) 概況(図1)

水稻の穂ばらみ期から出穂期の7月下旬は高気圧に覆われて晴れる日が多く、気温・日照時間は平年を上回りました。一方、7月28日には台風第8号が東北地方を通過し、29日は上空の寒気の影響で大気の状態が不安定で大雨にみまわれた地域もありました。

出穂終期にかかる8月上旬は、高気圧に覆われて晴れる日が多く、平均気温・日照時間も平年を上回りましたが、8月中旬は曇雨天の日が多く、特に前半は平均気温が平年の9月中旬・下旬並に低い日（平年差－4～－7℃）も観測されました。

### (2) 今後の見通し

東北地方の1ヶ月予報（仙台管区气象台8月19日発表）では、平均気温は平年に比べ高い確率が50%、日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%と予想されています。

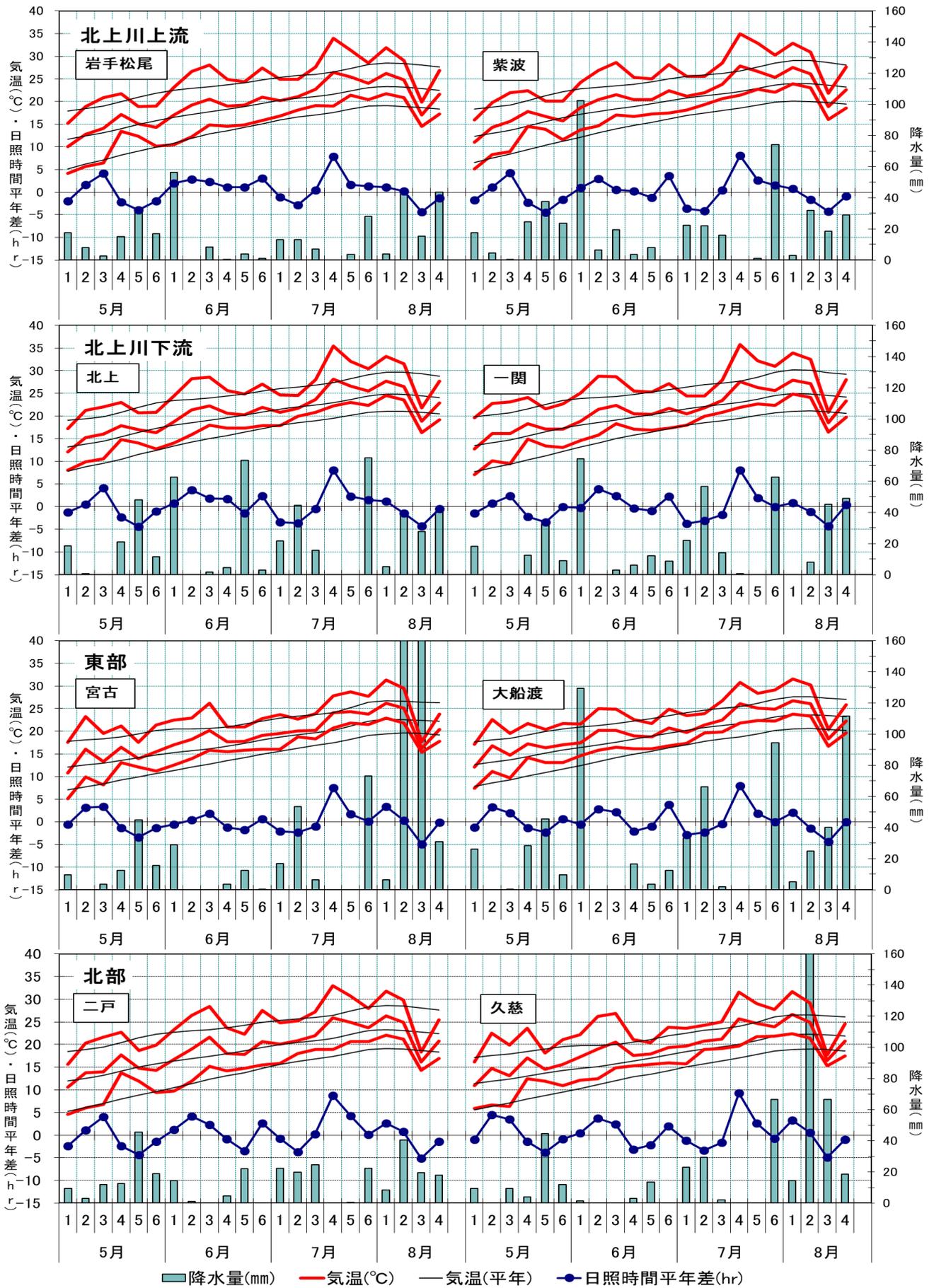


図1 半旬別気象経過図 (5月第1半旬~8月第4半旬)

### 3 玄米品質を低下させない水管理

#### (1) 登熟期の水管理

- ・ 間断かんがいを基本とし、徐々に落水期間を長くしていく管理とします。中干しが十分でない圃場は落水期間を長めにとり、機械収穫に必要な地耐力の確保を図ります。
- ・ 完全落水は排水不良田で出穂30～35日頃、排水のよい水田で出穂後35～40日頃を目安とします。  
⇒ 乾かしすぎ（白化・亀裂）は収量や品質低下につながるので注意
- ・ 遅植えや直播栽培などの出穂が遅い圃場において、登熟の早い段階で用水が利用できなくなる場合も、排水口を閉じるなどして、乾かし過ぎない管理とします。

#### (2) 台風や大雨時の水管理

- ・ 台風、大雨等で浸水や冠水の恐れがあるときは、排水口を開けて排水を促します。
- ・ 浸水や冠水した圃場では、速やかな排水に努めます。長時間の冠水は登熟に悪影響を及ぼすため、少しでも早く排水し、水稻の葉先を出すことが重要です。
- ・ 台風通過後は稲体が水分を失いやすいため、田面を急激に干さないよう間断かんがいとします。

### 4 適期刈取りの励行

#### (1) 刈取り適期の予測

- ・ 登熟前半の8月中旬は低温・寡照で経過していますが、出穂期がかなり早まったことから、今後、気温が平年並に推移した場合、登熟積算気温950℃（刈取適期の目安）の到達は、平年に比べ7日程度早まると予想されます（8月20日現在の予測：表3、図2）。
- ・ 長期予報においても、当面、気温は高めに推移する予想です。積算気温による適期の予測日が近づいたら、稲穂の黄化状況をよく観察し、テスト籾摺りをした上で刈取り可否を判断します。
- ・ 共同乾燥調製施設を利用する場合は、施設の稼働時期を確認し、作業計画を立てます。

表2 おもな品種の積算気温による刈取適期の目安

品種名	刈取適期の積算気温（℃）
ひとめぼれ	900～1,050
金色の風、銀河のしずく、どんぴしゃり、いわてっこ	950～1,050
あきたこまち	950～1,100
ヒメノモチ、もち美人	950～1,050
めんこもち	1,000～1,100

表3 各地域の出穂期と日平均積算気温950℃到達日の予測

地帯	出穂期（月/日）			登熟積算気温950℃到達（月/日）														
	本年			本年-平年（日）			予測①（+2℃）			予測②±0℃			予測③（-2℃）			予測②-平年（日）		
	始	盛	終	始	盛	終	始	盛	終	始	盛	終	始	盛	終	始	盛	終
北上川上流	7/27	7/31	8/4	-6	-6	-6	9/6	9/10	9/14	9/6	9/12	9/18	9/9	9/16	9/21	-8	-8	-7
北上川下流	7/28	7/31	8/4	-5	-5	-5	9/5	9/8	9/13	9/7	9/10	9/15	9/9	9/13	9/19	-6	-7	-7
東部	7/27	7/31	8/5	-7	-6	-5	9/6	9/10	9/16	9/8	9/12	9/18	9/10	9/15	9/22	-7	-7	-6
北部	7/28	7/31	8/4	-6	-6	-7	9/8	9/12	9/17	9/11	9/15	9/20	9/13	9/18	9/25	-8	-8	-8
県全体	7/28	7/31	8/4	-5	-5	-5	9/5	9/9	9/14	9/7	9/11	9/16	9/9	9/14	9/20	-7	-7	-7

1) 出穂期 … 始：10%、盛：50%、終：90%

2) 登熟積算気温950℃到達 … 日平均気温が各地域のアメダス平年値並（±0℃）、2℃高い（+2℃）又は低い（-2℃）場合の950℃到達日（8月19日までは各地域の最寄りアメダス現況値、8月20日以降はアメダス平年値）。

3) 出穂期及び950℃到達日の平年は、平成23年～令和2年の平均。

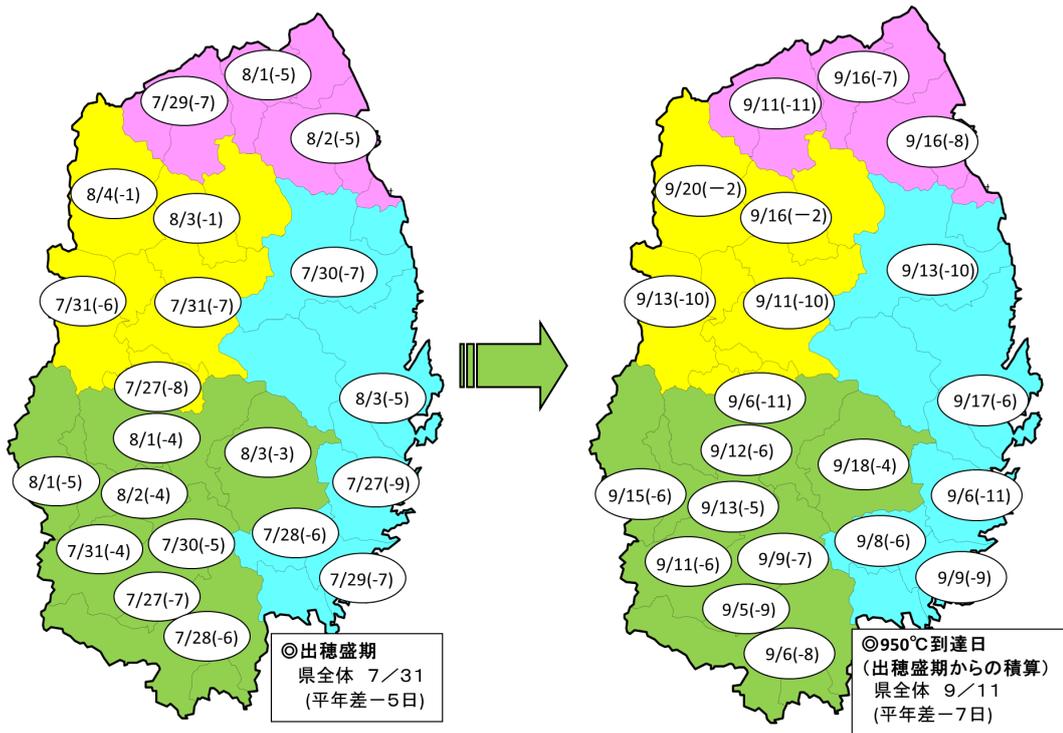


図2 各地域の出穂盛期から予測した刈取り適期の目安（登熟積算気温950°C到達日）

- 1) 左側：各地域の出穂盛期（月/日）、右側：刈取り時期の目安（月/日）
- 2) 刈取り適期の目安は、各地域の最寄りのアメダス地点について、登熟積算温度950°Cとなる予測日。  
(8月19日までは各地域の代表アメダスの現況値、8月20日以降は平年値を使用)
- 3) カッコ内の数字は、各地域の出穂盛期又は登熟積算気温950°C到達日の平年差を示す（例「-5」：平年より5日早い）  
なお、平年値は過去10か年（平成23年～令和2年）の平均。

## (2) 刈取り適期の判断

積算温度による予測は、栽培条件や日照の多少によってずれる場合があるため、最終的な刈取りの判断は次の手順により、**実際の登熟状態を確認しておこないます。**

### ア 黄化割合のチェック

平均的な大きさの穂を観察し、黄化した籾が1穂籾数に占める割合を確認します。

刈取り適期は「黄化割合80~90%」（80~90%の籾が黄化、10%程度が緑色：図3）です。



図3 黄化割合と刈取適期判断の目安

### イ テスト粳すりによるチェック

黄化粳割合が80～90%に達したら、数穂を採取しテスト粳すりします（図4）。

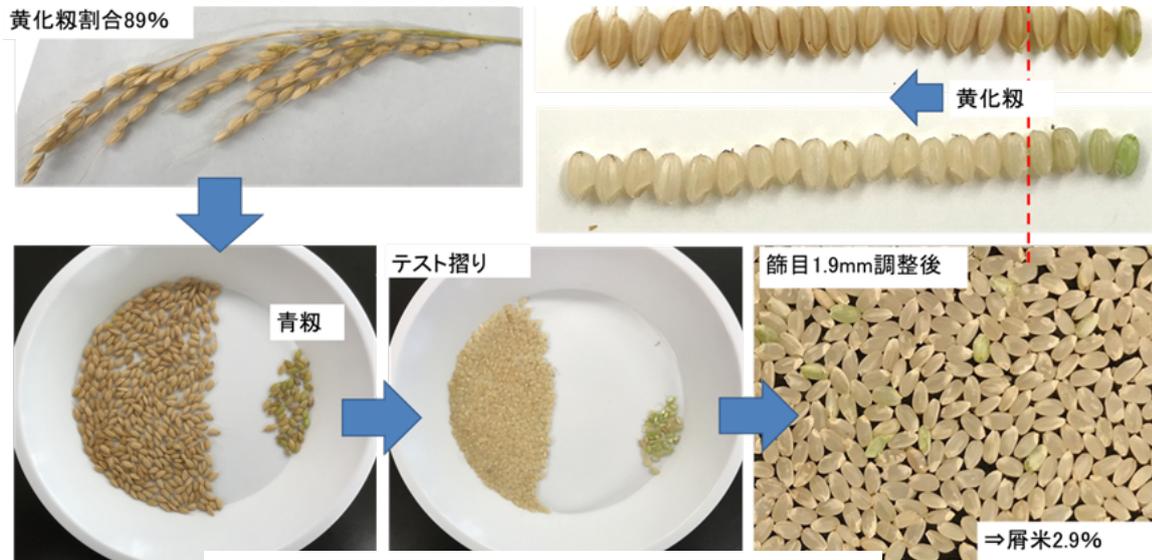


図4 粳の黄化割合と刈取適期判断の目安

### (3) 収穫作業の留意点

- ・ コンバイン収穫では、作業開始前に粳水分が20～25%の範囲であることを確認します。
- ・ 収穫後は生粳のまま放置せず、速やかに乾燥調製施設へ搬入します。
- ・ 水口付近などで登熟が大幅に遅れている部分や、倒伏した部分は可能な限り刈分けを行い、青未熟粒等の混入を避けます。

## 5 乾燥・調製の留意点

仕上げ水分は15.0%以下を徹底！！

### (1) 胴割れ粒の発生防止

- ・ 火力乾燥においては、1時間あたりの水分減少率（毎時乾減率）を0.8%以下とします。  
⇒ 乾燥速度を上げすぎると胴割れ粒が発生するため、急激な乾燥・過乾燥に注意します。
- ・ 4%以上の水分差がある粳を一緒に張り込むことは避けます。  
⇒ 粳水分18%の時に一旦乾燥機を止めて放冷・循環常温通風し、その後仕上げ乾燥して粳水分の均質化を図ります（二段乾燥）。
- ・ 自然乾燥（ハセ・棒がけ）は2週間以内を目安とし、時々掛け替えして乾燥を促します。

### (2) 粳すり時の肌ずれ、脱ぶの防止

- ・ 肌ずれを防止するため、玄米水分15.0%以下の適正水分で粳すりを行います。
- ・ ゴムロールのすき間は、粳の厚さの約1/2（0.5～1.2mm）が標準です。
- ・ 脱ぶ率は条件により変化するので、85%程度になるようロール間隔を調整します。

### (3) ライスグレーダー

出荷製品用は、LL（1.9mm）の篩い目使用を基本とし、整粒歩合80%以上を目指します。

## 6 異品種混入の防止

- ・ 産地から出荷する米穀は「表示銘柄以外の混入のない米」であることが必須です。
- ・ 異品種混入（コンタミ）が発生すると、品種名の表示ができなくなることに加え、産地全体のイメージダウンとなります。機械や施設の点検・清掃を徹底します。
- ・ コンバイン、運搬機、乾燥機や籾摺機など収穫・乾燥・調製機械や施設内には、前年の籾等が残留している可能性があるため、これらの機械や施設の点検・清掃を十分に行います。

## 7 農作業安全

収穫時期は日没が早まり、例年農作業事故の発生が多くなります。余裕をもった作業計画をたてるとともに、作業機に反射シールを貼る等、交通事故防止対策を講じます。

次号は9月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。